

電力中央研究所 正会員 牛島 省
電力中央研究所 正会員 加藤 正進
電力中央研究所 正会員 守屋祥一

1.はじめに 本報文は、昭和57年度に行われた2次元プレナム¹⁾内の定常・等温循環水流の乱流計測実験を対象とした、乱流モデルによる数値解析について述べたものである。解析に用いたモデルは、Launder²⁾らのReynolds Stress Model (RSM)とk-ε Model (k-εM)であり、これらの解析結果を計測結果と比較することによって、両モデルの有効性の検討を行い、さらに、RSM中のReynolds stress方程式の各項に関する若干の考察を行った。

2.実験の概要 実験装置の概略及び座標系、流速成分を図1に示す。流速の測定には、He-NeイオンLDVが用いられた。本実験は、田中ら¹⁾によって行われたものであり、ここでは、その詳細については省略する。

3.解析の概要 (a)基礎式 RSM及びk-εMの基礎式と係数値を以下に示す。

① 連続式と運動方程式(両モデルで共通)

$$\frac{\partial \bar{u}_m}{\partial x_m} = 0 \quad \dots \dots \quad (1)$$

$$\frac{\partial \bar{u}_i}{\partial t} = -u_m \frac{\partial \bar{u}_i}{\partial x_m} + F_i - \frac{1}{\rho} \frac{\partial \bar{p}}{\partial x_i} + \frac{\partial}{\partial x_m} (\nu \frac{\partial \bar{u}_i}{\partial x_m} - \bar{u}'_i u'_m) \dots \dots (2)$$

② Reynolds stress $\bar{u}'_i u'_j$ に関する方程式

$$\begin{aligned} [\text{RSM}] \frac{\partial \bar{u}'_i u'_j}{\partial t} &= -u_m \underbrace{\frac{\partial \bar{u}'_i u'_j}{\partial x_m}}_{\text{移流項(C)}} + P_{ij} - \underbrace{\frac{2}{3} \delta_{ij} \epsilon}_{\text{生成項(P)}} - \underbrace{c_1 \frac{\epsilon}{k} (\bar{u}'_i u'_j - \frac{2}{3} \delta_{ij} k)}_{\text{散逸項(E)}} \\ &+ \underbrace{\left\{ -\frac{c_2 + 8}{11} (P_{ij} - \frac{2}{3} P \delta_{ij}) - \frac{30 c_2 - 2}{55} k \left(\frac{\partial \bar{u}_i}{\partial x_j} + \frac{\partial \bar{u}_j}{\partial x_i} \right) - \frac{8 c_2 - 2}{11} \right\}}_{\text{Pressure-Strain 項(PS)}} \end{aligned}$$

$$\underbrace{(D_{ij} - \frac{2}{3} P \delta_{ij})}_{\text{(PS)}} + c_s \frac{\partial}{\partial x_m} \frac{k}{\epsilon} \left(\bar{u}'_i u'_j \frac{\partial \bar{u}'_j u'_m}{\partial x_1} + \bar{u}'_j u'_m \frac{\partial \bar{u}'_m u'_i}{\partial x_1} \right) \underbrace{\text{乱流拡散項(TD)}}_{\text{(TD)}}$$

$$+ u'_m u'_1 \frac{\partial \bar{u}'_i u'_j}{\partial x_1} \dots \dots \quad (3)$$

$$[\text{k-εM}] \bar{u}'_i u'_j = -c_\nu \frac{k^2}{\epsilon} \left(\frac{\partial \bar{u}_i}{\partial x_j} + \frac{\partial \bar{u}_j}{\partial x_i} \right) + \frac{2}{3} \delta_{ij} k \dots \dots (4)$$

$$P = -\bar{u}'_m u'_n \frac{\partial u_m}{\partial x_n} \dots \dots \quad (10)$$

$$D_{ij} = - \left(\bar{u}'_i u'_m \frac{\partial \bar{u}_m}{\partial x_j} + \bar{u}'_j u'_m \frac{\partial \bar{u}_m}{\partial x_i} \right) \dots \dots \quad (11)$$

係数値は、RSMでは、Launder²⁾らの提唱した値を用い、k-εMでは、標準的な値を用いた。それらを以下に示す。

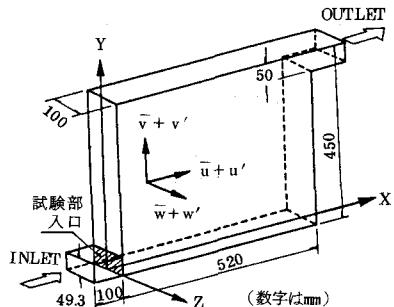


図1 実験装置概略図

③ 乱れエネルギーkに関する方程式

$$\begin{aligned} [\text{RSM}] \frac{\partial k}{\partial t} &= -u_m \frac{\partial k}{\partial x_m} + P - \epsilon + \frac{\partial}{\partial x_m} (c_s \frac{k}{\epsilon} \\ &(\bar{u}'_i u'_n \frac{\partial}{\partial x_n} \bar{u}'_i u'_m + \bar{u}'_m u'_n \frac{\partial k}{\partial x_n})) \} \dots \dots \quad (5) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} [\text{k-εM}] \frac{\partial k}{\partial t} &= -\bar{u}_m \frac{\partial k}{\partial x_m} + P - \epsilon + \frac{\partial}{\partial x_m} (c_k \frac{k^2}{\epsilon} \\ &\frac{\partial k}{\partial x_m}) \} \dots \dots \quad (6) \end{aligned}$$

④ 乱れエネルギーの散逸率εに関する方程式

$$\begin{aligned} [\text{RSM}] \frac{\partial \epsilon}{\partial t} &= -\bar{u}_m \frac{\partial \epsilon}{\partial x_m} + \frac{\partial}{\partial x_m} (c_\epsilon \frac{k}{\epsilon} \bar{u}'_m u'_n \frac{\partial \epsilon}{\partial x_n}) \\ &+ c_{\epsilon 1} \frac{\epsilon}{k} P - c_{\epsilon 2} \frac{\epsilon^2}{k} \dots \dots \quad (7) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} [\text{k-εM}] \frac{\partial \epsilon}{\partial t} &= -\bar{u}_m \frac{\partial \epsilon}{\partial x_m} + \frac{\partial}{\partial x_m} (c'_\epsilon \frac{k^2}{\epsilon} \frac{\partial \epsilon}{\partial x_m}) \\ &+ c'_{\epsilon 1} \frac{\epsilon}{k} P - c'_{\epsilon 2} \frac{\epsilon^2}{k} \dots \dots \quad (8) \end{aligned}$$

$$\text{ここで, } P_{ij} = - \left(\bar{u}'_i u'_m \frac{\partial \bar{u}_i}{\partial x_m} + \bar{u}'_j u'_m \frac{\partial \bar{u}_i}{\partial x_m} \right) \dots \dots (9)$$

C_1	C_2	C_s	C_{ϵ_1}	C_{ϵ_2}	C_ϵ	C_ν	C_k	C'_ϵ	C'_{ϵ_1}	C'_{ϵ_2}
1.5	0.4	0.11	1.44	1.90	0.15	0.09	0.09	0.07	1.44	1.92

(b) 解析方法 運動方程式の計算は、セミ・インプリシット法、圧力のポアソン方程式の計算は、SOR 法を用いて行われた。境界条件は、入口部分で、平均流速及び乱れ量 (RSM の場合のみ) の計測値を与える、 k と ϵ については $k = \frac{1}{2} (\bar{u}^2 + 2\bar{v}^2)$, $\epsilon = -\bar{u} \bar{v} \frac{\partial \bar{u}}{\partial y}$ とし、計測値から求めた値を与えた。出口部分では、諸量の x 方向の勾配を 0 とした。壁面部分では、平均流速には壁関数を用い、乱れ量は、フリースリップとした。

4. 結果と考察 (a) 平均流速分布 \bar{u} の分布を図 2 に示す。平均流速に関しては、両モデルの結果は、計測値と良く一致している。

(b) Reynolds stress の分布 ここでは、入口部から形成される壁面噴流の outer layer に相当する部分を対象とした。図 5 より、 $-\bar{u}'\bar{v}'$ については、両モデルの結果とも計測値と良く一致しているが、図 3, 4 に見られるように、 \bar{u}'^2, \bar{v}'^2 については、 $k-\epsilon M$ では、乱れの非等方性が適切に表現されていない。これは、(4)式で表わされる Boussinesq の仮説に原因があるものと考えられる。

(c) RSM の Reynolds stress 方程式中の各項の構成

(b) と同様の領域における、RSM の $\bar{u}'^2, \bar{v}'^2, \bar{w}'^2$ 方程式の各項の構成をそれぞれ図 6, 7, 8 に示す。図 6, 7 には、計測値を最小二乗法により多項式近似して得られた移流項 (C)、生成項 (P) が示されているが、これらと解析結果とは、定性的に良く一致している。

解析結果から、 $\bar{u}'^2, \bar{v}'^2, \bar{w}'^2$ の間では、Pressure-Strain 項 (PS) を通じて乱れの再配分が行われていること

が認められた。また、図 7 に示されるように、 \bar{v}'^2 方程式の生成項は、ある領域で解析及び計測結果とともに負の値をとる。これらのこととは、Irwin³⁾ の壁面噴流の実験結果にも良く似た傾向であらわれている。

5. 結論 本報文で対象とした流れの場においては、Reynolds Stress Model は、 $k-\epsilon M$ と比較して、特に乱流量の予測に関して、より有効であることが明らかとなった。今後は、非一様な温度場における乱流モデルの特性について検討を行う予定である。

最後に解析に御協力頂いた

田口富貴子氏（電力計算センター）に謝意を表します。

参考文献

- 1) 田中、守屋、片野；第 28 回水講論文集。
- 2) B.E. Launder 他；JFM, vol. 68.
- 3) H.P.A.H. Irwin ; JFM, vol. 61.

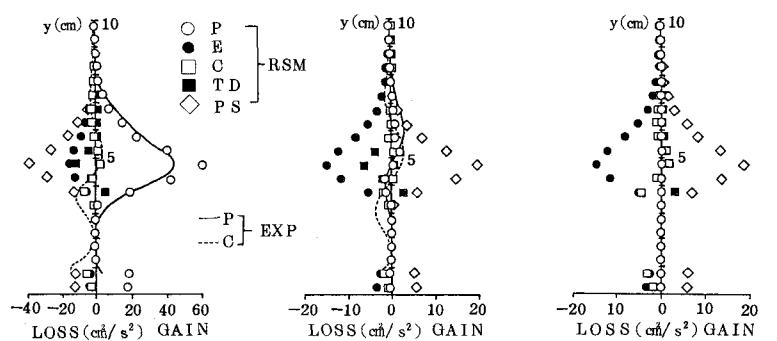


図 6 \bar{u}'^2 方程式の各項構成

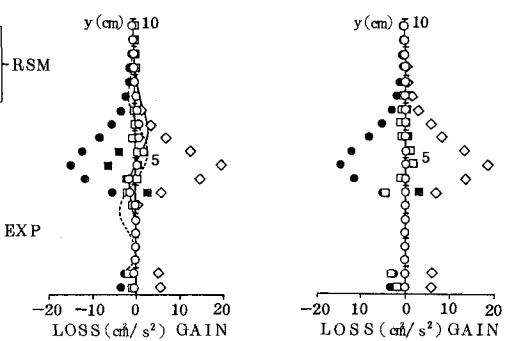


図 7 \bar{v}'^2 方程式の各項構成